

2021年度 第1回 入学試験問題

国 語 (50分)

解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

一 次の——線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- 1 リサイクル運動をテイシヨウする。
- 2 菓のキき目を確認する。
- 3 優れたシシツの持ち主。
- 4 怒りがキヨクゲンに達する。
- 5 ジュウライどおりに行う。
- 6 日本一といってもカゴンではない。
- 7 世界イサンに登録される。
- 8 この土地のキコウは厳しい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

たとえばショッピングで、気に入った洋服が二つあったとしましょう。洋服Aと洋服B。同じくらい気に入ったのですが、残念ながら両方を買うだけの予算はありません。断腸の思いでAを選びました。

さて、このとき、洋服AとBの印象はどう変わるでしょうか——AとBへの好ましさについてアンケートを採ると、面白いことに、選択前に比べて選択後はBへの平均評価が低下することがわかります。つまり、自分が選ばなかったほうの洋服について「それほどよくはなかった」と意見を変えてしまうのです。

そこで、別の選択実験を行ってみます。洋服Aと洋服Cの選択です。今回は洋服Cよりも、洋服Aの方がいくぶんか好みです。躊躇なくAを選ぶでしょう。この場合は、選択後のCへの評価は下がりにません。このことから、選択後の好感度の変化は、品物の好ましさに明確な差がないときにだけ現れることがわかります。

もう一つの実験を紹介しましょう。団体に入会するために「儀礼」を受けるといふ実験です。厳しい儀礼と、それほど厳しくはない儀礼のどちらかを受けて入会してもらいます。入団後に、その団体が好きかどうかを聞くと、厳しい儀礼を受けた人のほうが団体に対する好感度が高いというデータが出ます。

a、この二つの実験の結果をどう解釈したらよいでしょう。

一般に、自分の「行動」と「感情」が一致しないとき、この矛盾を無意識のうちに解決しようとするようです。b、行動

か感情のどちらかを変更するわけです。この二つでは、どちらが変えやすいでしょうか。言うまでもありません。「I」のほうがです。「II」は既成事実として厳として存在しています。事実を変えようがありません。そこで脳はIIIを変えざるを得ず。

洋服AとBでは、はじめは同じくらい好きだったかもしれませんが、c自分はAを選んで、Bを排除してしまっただけで、理由はな
んであれ、その行為こうい自体は事実であって否定できません。そこで「BもAと同程度に好きだった」という先の感情を変更するので
す。「本音を言えばBはそれほどよいとは感じていなかったのだ」と。一方、洋服Cは、はじめからAほど好きではなかったわけ
で、Aを選択したという自分の行為と感情にdはありませぬ。だからCに対する好感度を変える必要はないのです。
入会儀式の実験データについても同じように説明できます。儀礼はそもそも面倒めんどうで不快なものです。できれば儀礼は受けたくは
ありません。厳しい儀礼となればなおのこと。しかし、自分は厳しい儀礼を受けてまで入団した。これは事実である。この事実
変えられません。だからこそ「e」となります。

(池谷裕二『脳には妙なクセがある』扶桑社より)

問一 —— 線①「断腸の思い」③「躊躇なく」の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次のア、イ、ウの中から選び、記号で答
えなさい。

① 「断腸の思い」

ア、激しいいかり

イ、おさえきれない喜び

ウ、思い出されるにくしみ

エ、くり返される痛み

オ、こらえきれないつらさ

③ 「躊躇なく」

ア、はしたなく

イ、だらしなく

ウ、しかたなく

エ、ためらいなく

オ、かぎりなく

問二 —— 線②「Aを選びました」とありますが、それはBをどうすることだと筆者は述べていますか。次の文の空らんらんに当て
はまる漢字二字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

Aを選ぶということはBを() () することだ。

問三 — 線④「Cへの評価は下がりません」とありますが、それはなぜですか。次の文の空らん^らに当てはまる四字の言葉を文章の中から探し、抜き出して答えなさい。

どちらが気に入ったかという点で、洋服Aと洋服Cに（ ）があるから。

問四 洋服A、B、Cについて、選択する前のそれぞれの魅力^{みりょく}を5段階で評価する場合、次のア～オのどれが文章中の内容と合っていますか。最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。ただし、最も魅力ある評価を5とします。

ア、A || 5 B || 5 C || 4
イ、A || 5 B || 4 C || 3
ウ、A || 4 B || 4 C || 4
エ、A || 4 B || 5 C || 3
オ、A || 5 B || 4 C || 4

問五 空らん a、b、c に入る最もふさわしい言葉を次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、そのうえ イ、しかし ウ、つまり エ、もし オ、さて

問六 空らん I、II、III に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、I	行動	II	感情	III	感情	イ、I	行動	II	感情	III	行動
ウ、I	感情	II	感情	III	行動	エ、I	感情	II	行動	III	感情
オ、I	感情	II	行動	III	行動						

問七 空らん d に入る最もふさわしい言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問八 空らん e にふさわしい一文を考え、二十字以上二十五字以内にまとめて答えなさい。ただし、「私は」「団体」という言葉を必ず用いること。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

五年生の夏休み前のことだった。僕は一度包丁を捨てた。①一学期最後の家庭科の調理実習のせいだった。いや、実際には、不穏な火種はずいぶん前からくすぶっていたように思う。じつとひそかに、一気に燃えあがる日を待ちかまえていたのだ。

「前からちよつと思つてたけど、山田つて、あれじゃね？」

②教室から聞こえてきた声に、僕の両足は廊下の暗がりですトップした。五年二組の引き戸の手前だった。僕は図書委員の仕事が長引いて、帰りが遅くなっていた。放課後のがらんとした校舎は、壁も床も天井も、影さえもうつすらオレンジ色を帯びていて、ちよつとこわいぐらいだった。僕はオレンジ色の暗がりから、そつと首を伸ばして教室内を確かめてみた。

「あれつて？」

「なんつーか、へん。もとい、女子つばい」

「えー？ そう？」

「あー、でもなんとなくわかるかもー」

教室の隅に男子数人が居残っていた。吉村と井上と沢口と中西だった。

なんで僕が女子つばいってことになるんだ？ ムツとして、勢いそのまま怒鳴りこんでやろうかと思った。でも吉村の次の言葉で、

僕の両足は影の中に留まることを選んでしまった。

③「山田のホットケーキつて、すつげーうめえの。気味悪い」

調理実習の課題は、白玉入りフルーツポンチとホットケーキだった。家庭科の班は出席番号順なので、僕と吉村は同じ班だった。授業は三、四時間目が充てられて、プラス給食を食べてから五時間目は水泳という、かなり胃にパンチのある時間割りが組まれていたのだけど、僕は同じ班の百合岡さんがいいところが見せられたおかげで、二十五メートルプールを十往復ぐらいできそう

ほど元気だった。放課後になっても浮かれていた。そのせいで、危うく水泳バッグを忘れて帰るところだった。つまり、僕はタイミング悪く教室に戻ってきてしまったのだった。

「気味悪いってなんだよ？ うめーならいいじゃん」

「いやあ、まあ、そうなんだけさあ、ホットケーキがさあ、超しっとりでふっくらなわけよ」

「だから、いいんじゃない。俺の班なんて焦げ焦げで悲惨だったぞ」

「あー、でも吉村が言いたいことわかるかもー。なんでそんなことできるんだよって、若干引くってことだろ？」

「そうそう、若干どころかドン引きっていうか」

「確かに女子もちよっと引いてたよな。自分よりぜんぜんできる男子なんてなー」

「手つきが、なんていうか、女子なんだよなあ。いやむしろオカンか？」

「オカンて！」

四人は声をあげて笑いだした。ぴったりの陰口を見つけたみたいに。僕の拳はじっとり汗ばんでいた。それなのにとっても冷たくなっていた。

「あいつさあ、昼休みになっても、野球もサッカーもめったに仲間に入ってこねえじゃん？ どのスポーツクラブにも入ってねえみたいだし、なにやっつてんのかと思つたら、まさかのお料理だよ」

「じゃあさー、野菜の切り方の授業とか、初歩すぎて、内心バカにしてただろうなー」

「なあなあ、オカンで思ひ出したんだけど、あいつんちって、父親と母親が逆転してると話」

「えっ、なにそれ？」

「オヤジが働いてねんだって。主夫って話」

「ゲーッ、まじかよ？ 家にずっといるってこと？」

「ひゃー、俺なら絶対ヤダ。かつこわりい」

「なあなあ、ふたりで台所立って、フリフリのまっしろのさあ、おそろいのエプロンなんかつけてたりして〜」

「ゲーッ！ さすがにそれはヤバイ！」

僕はそこまで聞いて、音をたてずに一、二歩暗がりを後退した。あいつらバカだろ。そんなわけないに決まってるんだろ。そう口に出したのには、両足は廊下を駆け出しはじめていた。四人の笑い声が追いかけてきた。僕は振りかえらず、全速力で昇降口まで走りつづけた。げた箱の前で、のんきにTシャツを泥だらけにしている佐藤と会った。けど僕はかまわず、運動靴に両足をつっこむと、もう聞こえないはずの声を振り切るように、自宅までわき目もふらずに走った。

あとあと気づくんだけど、吉村も百合岡さんのことが好きだったのだ。たぶん僕よりずっとずっと。

山田くんすごいね。お店の人みたいだね。百合岡さんがそう褒めてくれるのを横で聞いていて、吉村はおもしろくなかったのだろ。それで、ついあんなふうに憂さ晴らしをしてみたのだ。今ならわかる。みんなガキだったのだ。そしてガキ代表の僕は包丁を捨てたのだ。自分以外に料理をする男子も興味を持ってきている男子も見当たらない。気になっていただけにしないようにしていた、ずっとモヤモヤしていた気持ちだが、ついに燃えあがって灰になったのだ。

父さんが家にいるのも、参観日に来るのも、チラシをつぶさにチェックして買いものに行くのも、こつこつポイントカードのポイントをためるのも、母さんの下着を形を整えて干すのも、遊びにきた友だちに手づくりのシフォンケーキなんかを出すのも、学年が上がるにつれて、本当は嫌で嫌でたまらなくなっていたのだ。

僕はみんなと同じ色をした、見えない皮膚をまとうことにした。そして計画どおり、一ヶ月半の夏休みは、僕を典型的な少年へと焼きあげてくれた。

野球もサッカーもバスケットボールもめったにしなかったのは、天然記念物級に球技がヘタだったからで、でも僕は思いきって地域のサッカークラブに参加してみた。ヒマな佐藤に誘われるままプールにも通った。近隣のお祭りとは花火大会は網羅したし、佐藤の思いつきによって十五キロ先の海水浴場まで自転車で行ったし、宿題はどんだんたまっていた。父さんにつきあって家庭菜園の世話をすることもなかったし、もちろん新しい料理のひとつも習うこともなかった。そういうわけで小麦色の皮膚がペリペリとむけるころ、その下から現れた僕は新しい僕に変わっていた。

辰美が僕の前に現れたのは、それから少しあとのことだ。二学期はとっくに始まっていて、運動会を終えてまもなく、彼は教室のいちばん前に、五年二組の新しい仲間として立っていた。

「タツミだって」

近くでだけかがこそつとと言うのが聞こえてきた。担任の先生の大きな字で、彼の名前は黒板にはつきりと書かれていた。それを讀んだとき、僕もタツヨシだろうと思った。でもそのままタツミだった。

「渡辺辰美です。よろしく願います」

辰美は短くあいさつした。アクセントがちがっていた。ただ、どちらがうのかはよくわからなかった。関西弁っぽいのに、東北弁や九州弁もまじっているような、独特の話し方のせいだったのだろう。これもあとあと知るのだけど、辰美の話し方が独特なのは、日本各地を転々と引っ越してきたせいだった。

辰美の黒くて大きな瞳は、臆することなく、ほかの六十個の瞳を見渡していた。僕の心の隅に、なぜか、墨を一滴落としたような染みがじわりと広がっていった。

辰美はあまりしゃべらなかつた。というか、あまりクラスになじまなかつた。無視しているわけじゃなかつた。おはようと言え
ばおはようと返ってきたし、昼休みのサッカーに誘えばいいよと応じてきた。でもその程度だつた。最初は転校してきたばかりで
緊張しているのだからと思つていた。けど半月経つても同じ調子なので、しだいにだれもが辰美と距離を置くようになってしまつ
た。寡黙さと独立心は、彼のはつきりした面立ちも手伝つて、女子にはひそかな人気を呼んでいた。もちろん女子とも親しくしな
いのだけど、音も匂いもなくゆつくり充満していく毒のように、男子の反感を膨張させていくにはじゆうぶんだつた。

パチンと弾けたのは、調理実習の時間。二学期に入って三回目の授業だつた。

名字がワ行なので、辰美は僕と同じ班に入った。献立は白米、みそ汁、肉野菜炒め、オレンジゼリー。この日の五年二組に給食
は用意されておらず、つまりなんとか自力で食べられるものをつくらなければ、腹ペコの午後が待ちかまえているのだつた。

僕はまったく動じていなかった。腕に自信があつたからじゃない。そういう安堵ではなかつた。新しい僕になつてもう三回目の
調理実習で、僕はうまく失敗できる自信にみなぎつていたのだ。一回目はすぐドキドキした。卵をぐしゃりと割つて、ポウルの中
をこまかな殻だらけにしたのはわざとらしかつた。二回目もまだ緊張した。でも失敗は成功した。野菜はみじん切りにでき
なかつたし、鮭のムニエルはパサパサに仕上げられたし、コンソメスープの鍋は噴きこぼすことができたのだから。

「あー、もー、山田、気をつけるよなー」

あわてて鍋蓋を持ち上げる僕を見て、吉村がおかしそうに笑つて注意してきた。

「ごめんごめん、ぼーつとしてた」

新しい僕は同じように笑いかえした。昔の僕の上に、ありきたりな失敗を上書き保存したのだ。超しつとりでふつくらなホット
ケーキは消去されていた。あれはたまたま得意だつただけなんだと、みんなの頭の中の情報を書き換えさせてもらったのだつた。

みんなとおんなじようにいることは、ミルク色の生ぬるい湯に全身をゆだねて浮かんでいるようだつた。僕はねむたいような安
心感にくるまれていた。そのまどろみに冷水を浴びせかけてきたのが辰美だつた。

「遊び半分で食べもんに触るんは失礼やろ」

僕と吉村の包丁は止まつた。野菜炒め用のニンジンの皮むきをしてるところだつた。僕は慣れた手つきで、三回目の失敗に取
り組んでいるところだつた。ニンジンの皮は硬くてむきづらく、⑦橙色のぶ厚いカタマリがまな板の上に散らばつていた。

「ああ、もつたいな。ニンジンはな、ほんまは皮ごと食うたらいいんじゃないかな。ほら貸してみい」

僕らはすなおに辰美のためにスペースを空けた。久しぶりに彼の長いセリフを聞いて驚いたせいだつたのだろう。辰美はまな
板の前に立ち、僕から包丁を受け取ると、ニンジンの皮をむきはじめた。本当に驚いたのはそれからだつた。

「……………すげー」

声に出したのは百合岡さんだった。僕はただ彼の手つきに目を奪われていた。するするむかれていくエンジンの皮は薄く薄く、まるで羽衣のように透きとおるほどで、しかも無駄な動きの一切ない実用的な素早さだった。あつという間にエンジンは美しくいちよう切りに整えられてしまった。

「よかったら、残りの野菜も切ろうか？」

「うん、うんうん、そうしてそうして。吉村くんたちに任せてたら、食べられる部分のほうが少ないつちゃうもん。わあー、すごいんだねえ渡辺くん！ テレビで見るプロの人みたい！」

また答えたのは百合岡さんだった。彼女ははしゃいで、残りのキャベツ、ピーマン、玉ねぎ、しめじをすぐに辰美の前まで持ってきた。辰美はそれらを次々に切っていた。なめらかにリズミカルに。同じ包丁を使っているとは思えなかった。それぐらい僕らとは差があり、食材を切る係だった僕と吉村は黙って見ているしかなかった。バカみたいに立ちつくしていると、辰美がフライパンをガスレンジの上に置いた。炒める係は百合岡さんだったのだけど、最後の工程まで辰美に任せるらしかった。

「できれば鉄のフライパンがいいんやけどね。強火で一気に炒められるけん」

辰美はだれへともなく説明した。いつのまにか調理台のまわりに人だかりができていたからだだった。ほかの班からだけでなく、家庭科の先生まで興味深そうに近寄ってきて、辰美の手もとに注目していた。

やがて四時間目終了のチャイムが鳴った。僕らの班は、それはおいしい昼ごはんにありつけた。べちゃつとなりがちな野菜炒めも、辰美が何度もフライパンを振って手早く全体に火を通してくれたため、しっかり炒められているのにシヤキツと小気味よい歯ごたえが残っていた。

ほんとうにおいしかったのだ。僕は心の底から感動していた。そして奥歯で箸を噛みしめていた。あの墨をたらしたような染みが心に広がっていった。今度ははつきりと、心の真ん中に。

僕はその日の夜遅く、いや日付をまたいだころ、足音を殺して階段を下り、寝静まった家の灯りを一ヶ所だけつけた。キッチンだった。たかが四ヶ月。僕は自分に、キッチンに言い聞かせるように、心の中で繰り返しかえしつづやっていた。

鍋やフライパンの数も、塩や砂糖やスパイスのならぶ順番も、作業台の角に僕がつけた傷も変わっていないかった。それなのにもうそこは見慣れた知らない場所になっていた。やけに床が冷たかった。這いあがってくるような寒気に、僕は繰り返しかえし繰り返しかえし、大丈夫大丈夫となえつづけた。

卵、牛乳、ホットケーキミックス粉をまぜて焼くだけ。それだけのはずなのに卵はうまく割れず、牛乳はこぼし、粉はボウルの外に飛び散った。フライパンに油を引いてもつたりしたタネを落とすと、なつかしい気泡がぷくぷくと表面にあらわれてきた。僕はほっとした。でもいたずらな安堵だった。もう生地をひっくり返さないといけないタイミングだというのに僕の右手は震える

のだった。意識すればするほど震えは大きくなっていた。見るからに生地はパサつきはじめ、焦げ臭さも鼻をつきだし、いいかげん思いきってフライ返しで生地をひっくり返してみるも、案の定フライパンの縁にひっついてしまい、あわてて剥がそうとしたら指を火傷してしまった。

とんでもないことをしてしまった。愚かな僕は、今さらながら気づいたのだった。超しつとりでふっくららのホットケーキ？ 目の前に横たわっていたものは、黒くまだらに焦げた、いびつで硬い小麦粉のカタマリでしかなかった。

たかが四ヶ月。そのはずだった。でも僕は包丁を捨てたのだった。つまらない理由で、みずから料理を捨ててしまったのだ。そんな僕を料理の神さまがとっくに見捨てていたって、なんのふしぎがあっただろう？

赤く腫れてジンジンと僕は痛んだ。キッチンだけ不自然に明るい家の中で、抜け殻になった他人のような両手を、ただ見下ろすことしかできなかった。

「タツミちやくん」

吉村があらぬほうを向いて小さく叫んだ。昼休みの校庭でのサッカーだった。僕はひそかにビクツとなった。

ニヤニヤ笑いを含みながらサッカーボールは吉村に蹴られていた。井上にパスされ、沢口にカットされ、そして中西に回されて校庭を走っていった。名前を呼ばれた辰美にはいつさいボールは渡らなかった。サッカークラブをサボりがちになっていた僕の実力が伸びているわけもなく、僕はただただみんなと並走しながら、辰美のようすを目の端でうかがっていた。

席替えで百合岡さんのとなりに辰美が座ったのがトドメだったのだろう。あの調理実習以来、彼女が一方的に話しかけているようなものだったけど、辰美との親しさはぐんと増していた。それが吉村の神経に障らないはずがなかった。席替えの実施は十一月に入ったばかりの月曜日。そして翌日、僕のとくと同じように、いやもつと露骨に、吉村は辰美を潰しにかかったようだった。しかしそんなのは決定的に誤算だったのだ。だって僕と辰美には、雲泥の差があったのだから。

「はあ、アホらし。俺、もう抜けるけん」

僕の視界の真ん中で、辰美がそう言っって背を向けた。すると次の瞬間だった。白黒の直線が目の前をまっすぐ飛んでいった。ボンツと鈍い音がひびいた。サッカーボールは辰美の太ももあたりにぶつかって、さらに校庭の隅のほうまで転がっていった。

「あーあ、タツミちやくん、ちゃんと受けなきゃダメじゃーん」

まるで心底同情するかのような吉村の声だった。おまえ性格悪すぎ、と中西が笑いをかみ殺して小声で言うのも聞こえた。井上も沢口もニヤニヤしていた。彼ら以外の男子はさすがにうるたえていた。しかしそれもわずかなもので、だれも辰美をかばおうと

はしなかった。辰美の凜とした態度は、周囲の人間を小馬鹿にしているようにも映っていた。だからわざわざ陰口を叩いて自分を貶めたくはないけれど、少しぐらい痛い目を見ればいいのという善人のままで育てられる黒いトゲに、みんなはそつと水をやりつけていたのだ。なんにせよ、へたにかばって、己に火の粉がふりかかるのだけはごめんだった。

「やっぱりあれかあ、サツカーよりお料理かあ、ボールよりエプロンのほうがお似合いかなー、タツミちゃんだもんない」

吉村の悪意は、さざなみのように打ち寄せ、みんなに伝播していった。いつもの澄ました表情がゆがむのを待ち望んでいた。だけれどやっぱり、決定的に見当違いだったのだ。

「おまえら正気？ レベル低すぎてまじ引くんだけど」

ざらりと、砕けたガラスが舌の上にはらまかれた気がした。みんな言葉を失っていた。

「お料理？ 料理するのがなんだって？ イタリアンでもフレンチでも、寿司職人だって、プロの世界で腕ふるってる男はごまんというだろ。俺が目指してんのはそこなんだよ。ままごとでやってんじゃねーんだよ。家庭の味は家庭の味でいいと思うけどさ、おまえらの大好きなママがつくってるようなもんはさ、俺は求めてないわけ」

だれもひと言も発せなかった。そういえば吉村の家はシングルマザーだったつけと僕は頭の片隅で思い出していたけど、このさいそれはなんの関係もなかった。

息を整えるための時間を稼ぐように、辰美は僕ら一人ひとりを見回していった。もちろん辰美も怖かったのだ。あとあと教えてもらうことになるのだけど、辰美はひどく動揺すると、標準語になってしまいうらしい。このときはあまりのことに気づかなかつたけど、確かにスラスラしゃべっていたような気がする。

辰美はグラグラ煮えたぎるマグマを内に秘めた火山だった。自己防衛のために僕らを睨んでいた。反感を買うだけの結果にもなりかねなかったのに、そんなことは辰美もわかっていただろうに、自己保身とは真逆の、こんな身体なんてバラバラに爆発したってかまわないといった破滅的な覚悟のようなものがグラグラみなぎっていて、生半可なガキ全員の薄桃色の舌を引っこ抜いていた。

⑨「目標がないやつにかぎって、他人をけなしたがるんだよな。そんなにヒマならなんかやってみたら？ だからモテねーんだよ」
語尾は震えていたような気がする。それでも最後まで毅然とした態度をつらぬき、辰美はふたたび僕らに背を向け、校舎のほうへと去っていった。

(白石睦月『母さんは料理がへたすぎる』ポプラ社より)

問一 — 線① 「僕は一度包丁を捨てた」とありますが、ここでの「包丁を捨てた」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、料理を失敗したこと。
イ、料理をしなくなったこと。
ウ、料理でケガをしたこと。
エ、料理で恥はじをかいたこと。

問二 — 線② 「教室から聞こえてきた声に、僕の両足は廊下の暗がりですトップした」とありますが、何をするために「僕は教室にやって来たのですか。一文にまとめて答えなさい。

問三 — 線③ 「気味悪い」について

(1) 「吉村」はどのような点が「気味悪い」と考えているのですか。「()なのに()よりも()という点」という形にまとめて答えなさい。

(2) この「吉村」の発言をのちに「僕」はどのようなものと受け止めますか。文章中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問四 — 線④ 「野球もサッカーもめったに仲間に入ってこねえ」のはなぜですか。その理由となる十五字以上二十字以内の表現を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問八 — 線⑧ 「いたずらな」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、悪意のある イ、ふざけた ウ、意味のない エ、あつという間の

問九 — 線⑨ 「目標」とありますが、「辰美」の目標は何ですか。十五字以内にまとめて答えなさい。

問十 — 線「僕と辰美には、雲泥の差があった」とありますが、この二人の差についてくわしく説明しなさい。ただし、「周囲の目」「料理」という言葉を必ず用いること。

以下
余
白

国語(二)

三

問一

問二

問三 (1)

(2)

問四

15

問五

問六 (1)

(2)

問七

問八

問九

問十

受験番号			

氏 名